資料紹介

昭和四一年一〇月二四日

昭和天皇・皇后両陛下 合板メーカー 二平合板株式会社御視察

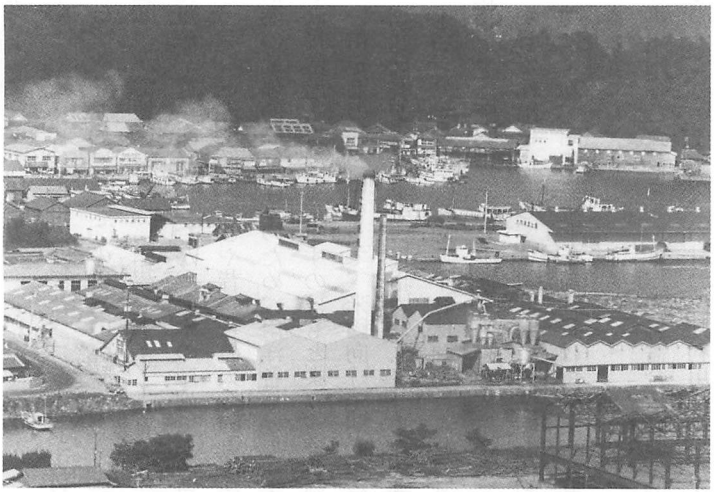
高盛西郷
（会員　佐伯市大入島）

その時の御案内の様子を書き留めた村上博之社長の「奉送迎記」にこの程ふれ、その資料を御紹介します。

【はじめに】

〝人間天皇〟を宣言された昭和天皇が全国を巡幸なされ宮崎県から大分県に上り、初めて佐伯駅に御到着されたのは昭和二十四年六月八日でした。そして昭和四十一年十月二十三日第二十一回全国国民体育大会大分大会に臨御（りんぎょ）なされた天皇・皇后両陛下は翌二十四日、汽車で再び佐伯駅に御到着、数多くの市民が奉迎しました。

新設されたばかりの佐伯球場で高校野球を御観覧なされた後、地域産業視察のため、創業二十年目の二平合板を訪れ、会社を挙げて奉送迎した光栄の日であります。



両陛下の行幸された二平合板本社工場

奉送迎記

二平合板株式会社
社長　村上　博之

数日前の天気予報では、曇小雨ということであったが十月二十四日は快晴であった。

待ちに待っていた両陛下の到着時刻、午後一時五十七分は刻々と近付く。ところがなかなか御車が見えて来ない。十二分遅れられたのではなかろうか、やがて最敬礼してお迎えする中に御到着になられた。

直ちに奏上室に御案内申し上げる。もともと所定の時間がやや短く案じていた上に遅れられたので、つい奏上だけの読み方も早くなるのであったが、一字一語頷かれて納得してしまわれようとする。陛下の御聞き取り振りに読む声に力が入り、汗が一杯に流れるのであった。奏上が終わると直ちに御言葉があり、「初期の目的を達成するよう努力することを希望する。」と仰せられ、その時初めて拝する玉顔は殊の外に艶々とせられ、御血色のおよろしきに、ありがたくもまた、私の身の引き緊るのを覚えたのである。

《奏上文》

『謹んで二平合板株式會社の概要について申し上げます。弊社は、戦前朝鮮に於てこの事業の經験を有する前社長村上弘一が當地に引揚後、昭和二十一年十二月創業し、幾多の艱難辛苦がありましたが、原木の産地であるフィリピン、ボルネオに近いことや昔からの天然の良港である佐伯港の地理的優位性等のため、南洋各地から原木積取船が直接當港に入港致しますのはもとより、運賃同盟の數少い指定港の一つになって、米國向け定期船が毎月入港し、弊社製品を直接米國に積出してをり、現在従業員八百五十名、今年の賣上豫想二十八億圓に及ぶに至りました。輸出こそ國力發展の礎であるといふ信念の下に、經験を生かして輸出に寄心し、實績は常に同業の上位を占めその功により、昭和三十七年前社長は黄綬褒章受章の光榮に浴しました。

仕事の内容と致しましては、内外需合板の製造が主なるものでございますが、木材の有効利用を計るため不適材利用の製材品を、また廃材利用の乾式繊維板、集成材木炭等を更に二次加工品として各種塗装合板並びに熱圧式高級化粧合板、國産材化粧合板等を製造致してをりま

す。合板工場としては御視察を賜ります本社工場の外に、隣接驛海崎に昨年新設の工場は、側に日本有数の水中大貯木場を控へ自動式諸機械を具へた日本並びに世界でも最新式の能率的工場でございます。

従来合板は建築の内装、家具の材料として使用されるものが殆どでございましたが、接着剤の進歩に伴ひ、最近では外装用例えばコンクリートの型枠用としてまた建物の外壁として、その他洋室の床板素材或は太平洋横断の例にみられたやうにボート・ヨット等の船體用としてまて用途が拡大し、また強く續く住宅建設の需要のため使用量の増加は眼を瞠せるものがございます。この傾向は獨り我國に止らず同時に世界の趨勢でもあり輸出に内需に前途は洋々たるものが感ぜられます。

最近では臺湾、韓国等に於ても優秀な労働力と低廉な賃金を基盤に、この事業が急速に發達し競争的関係にありますが、我業界としては國の内外を問はず相提携して夫夫の國民生活の向上に寄與することに努めると共に、先輩として常に研鑽を重ね一歩進んだ新技術新製品新需要の開發また原料確保のため新産地の原始林の開拓にも當る所存でございます。

本日茲に畏くも
天皇　皇后両陛下の御親臨を忝うし作業工程を具に天覧賜りますことは、私以下全従業員の恐懼感激措く能はざるところでございます。この光榮は子々孫々に至るまで肝に銘じ弊社の社是と解してをります。輸出振興と良品製造といふことに全従業員一體となって微力を盡す覺悟でございます。

以上、謹んで奏上申上げます。

昭和四十一年十月二十四日

二平合板株式会社取締役社長　村上博之』

工場に御案内申し上げる。その時の私は後から聞くと正に顔面蒼白、足取りもふらふらしていたという。先ず入り口の所に準備した製造工程図を鞭をもって御説き申し上げるのであるが、時間が短い事が気になって充分に申し上げることが出来ない。第一の御説明場所になっているが海岸の突堤に出るまでの間、ドライヤー、単板補修、剥取単板の受取り作業等を簡単に御説明申し上あげるのであるが、一つ一つについて、お立上がりになりじっくりと見ようとせられるので、先導の足取りは却って益々速

くなってしまうのであった。

海岸に出たところで、フィリピン、ボルネオから原木を積んで入港した三隻、製品を積んで米国に向おうとする太平洋定期船、計四隻のふねから奉迎の真心を表す長一声の汽笛吹鳴らしがあった。

突堤上にて佐伯湾の風光を眺められる両陛下
（四隻の入港船が一斉に歓迎の汽笛を吹鳴）

陛下は人が立っている姿など全然肉眼では認め得ないこれらの船に向かって、畏くも帽子を振って、その奉迎に応えられるのであった。後で分かったことであるが、この御姿を望遠鏡で遙かに拝した南星丸の老船長は、嬉しさに感泣していたという。この南星丸は十月三日に佐伯造船所で竣工し、ボルネオで原木を積取り満船して、弊社に持って来た処女航海の船であった。

所定の堤防の所に準備された御立台に立たれた両陛下に湾内の景色をあれこれと申し上げる。私が墨で書いた大入島の図と対照して、「先帝陛下が皇太子殿下であらせられた明治四十四年十月二十三日に登渉し給われたその十月二十三日は昨日の日付であり、本日陛下をここにお迎え申し上げるのは正に五十五年目の事でありますと申し上げる」と、両陛下は微笑み給われた。

鞭を持って、四図の形勢を御説明申し上げた後、先導の私は気が付かなかったのであるが、台を降りられる時一寸、天皇陛下がお躓きになられ、後を振り返られて皇后陛下がそのようなことがあられないよう、注意の御面持ちで見ておられたのは如何にも御睦き御様子であったという。

巨大なラワン原木切断の箇所では、御道筋から特に玉

歩を進められて、木に触れられ、樹種、特徴、日本の木ではいけないのかなど、次々に御下問を賜わった。如何にも学者としての探求心に富まれ、また、国産品を愛用したいという大御心によるところであると拝察された。

原木を薄い単板に剥ぐロータリーレースの機械の上に紅白で巻いた傾斜の緩い桟橋をかけてあり、そこに御足を進められたのであるが、この機械には殊に深い御興味をお持ちになられたように思う。輸出合板の表板用に〇・六七ミリの厚さで剥いでいますが、パルプや紙のように均質ではないので、このようにうまく剥げることはなかなか難しいことを申し上げた。この頃もまた時間の過ぎることが気になっていた私は早目に降りかけたのであるが、後を見ると、陛下が御覧になっておられるのでもう一度お側に近付き、また降りようとすると今度は、皇后陛下がまだ御熱心に見ておられるので、天皇陛下と私がお待ちするという有様であった。

ラワン材の切断を御覧になる両陛下

ロータリーレースの説明を聞く

糊着作業のところでは、ホットプレスの前で最近の接着剤の進歩と工程の御説明を申し上げた。

次の輸出単板補修のところで、時間が余っているとの係官の耳打ちを得て、私の気持ちに大きなゆとりが出来た。輸出用塗装合板のところには手にとって御説明申し上げたところ、皇后陛下も微笑んで御覧いただいた。

製品展示場では販売、販路、用途の状況など充分に御説明申し上げ、陛下も亦、私に親が子にいうようにいろいろと御尋ねになられた。

難燃合板について、「火が燃えないのはどうしてか。」また、エレナ合板のことでは「紙を樹脂化したものを熱圧したものであります。」と申し上げましたところ、「紙ならば軽いか。」と御不審があり、「いえ、その紙を合板に張ったものでありますから目方は合板と同じであります。」と申し上げると、「ああそうか」と仰せられた。「総じて高級合板はいいと分かっても売れ難く、値段の廉いことばかりを買手は要求するので困ります。」と申し上げるとお笑いになられた。

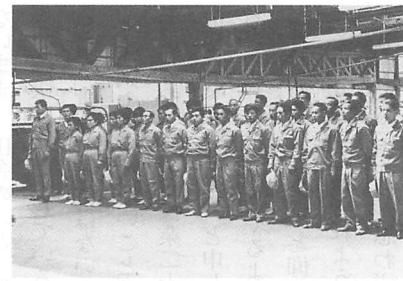
今回の行幸啓の御宿泊所である別府の杉の井ホテルの御部屋の一部にも、このエレナ合板が遣われ、壁は全部弊社の普通合板の上に美しい布を貼ったものであることや、豪華に新装なった東京の帝国劇場の一部にも使われていることを申し上げた。

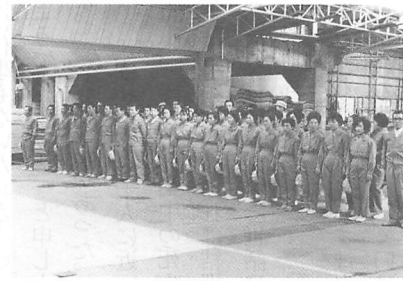
「従来の黒板に白黒で書いた文字はごしごしと擦らねば消えませんが、このエレナ合板黒板ならばこのようにすると消えます。」と申し上げると、私の申し上げ様をおかしく思われたのか皇后陛下は口に手をあてんばかりにお笑い給われた。「廃材を利用してこのような木炭を造り、人絹の原料である二硫化炭素になります。」と申し上げますと「無駄がないね。」と仰せられた。「そこでございます、原木産地のフィリッピン、ボルネオとも競争していくのは要するに如何に無駄をなくすかということにあります。」と申し上げると、大きく頷かれた。

また、住宅需要の増大に伴いプラスター合板、聚楽合板、国産材貼りの床板、コンクリート合板型枠が売れていることを申し上げた。夫々の見本や弊社製品で出来ているヤマハオルガン、ソニーのラジオその他の御説明を申し上げると、一つ一つを覗き込まれ、手に取られるようにして御興味深く御覧になられるのであった。

それから最後の工程、輸出合板検査の状況、ロンドン、

チャーストンなど行先を刷り込んだ梱包の状況を御覧いただいた。





工場にて奉送迎する従業員

そこで御視察は全部終わられたのであるが、出口に奉迎申し上げている従業員の隊列の前で全く予定外の申し訳ようもないことを私はしでかしたのである。創立二十年以来永年勤続者を御説明申し上げ、御会釈を賜ったのは先ず無難であったが、隊列の中から「この方は弊社の労働組合長でございます。」と申し上げたのは、後から考えるとお詫びの仕様もない無礼なことであった。それにも拘わらず、陛下はこの時、玉歩を一、二歩進められて組合長にお言葉を賜ったのである。後から組合長に聞くと流石に同人も、血が頭に逆流して何を承ったのか分からないと言っていたが、「要するに業務にしっかり精励してほしい。」とのお言葉であったかと思われる。まことに忝なくも懼れ多いことであった。陛下が常々如何に労働組合が現在の産業、経済、政治にも影響力を持っているかということを御認識、また御軫念遊ばされているかということを痛感した次第である。

何よりも第一に日本人たる組合員諸君はこの大御心の程をよく自覚して日本の発展を期して勤労しなければならぬと思うが、同時に我々経営の任に当たる者も自らの誠心を尽くして現今世上に見られるような労使紛争の如きことのないよう、国民一体となっての勤労の実を挙げるよう相務めねばならぬ、このことについての御軫念を払拭し奉るべく、自らを省み奮起するところがなくてはならぬと痛感した次第である。

門庭の特別奉迎者に御会釈を賜りながら、鳳輦に進まれる。この時正門の所に立ち上がられ、先程工場内御案内

の時、勤続十八年の女子従業員のことを申し上げたのであるが、その時のことにつき「女子が十八年も勤続するのはご苦労なことであるな。」というように仰せられた。その御言葉のありようが、とても普通の人の言葉とは違い、私は思わず、私のところの従業員にこれ程までの御愛情をいただくことのありがたさに、胸が迫り涙がほろほろと出たことを覚えている。咄嗟のことで申し上げようもないまま、「田舎のこと、他に仕事もないためか夫婦共稼ぎで愉快に仕事をしているようであります。」と申し上げると、「重ねて病気はないか。」とおたずねがあった。

「病気や怪我もないことはありませんが、千人に近い従業員がありながら操業二十年来、一度も作業中の死亡事故はございません。」と申し上げたところ、「それは結構である。益々しっかりやるように、今日はいろいろ世話になった。ありがとう。」と仰せられた。

そこで御車に進まれようとせられた。その時、あまりのありがたさに、私が思わず心からのお願いとして口にでたのであると思うが、「ありがとうございます。陛下こそ愈お健やかであらせますようお祈り申し上げる」と、振り返られて、「ありがとう。」と強く仰せになってご乗車になられた。

『義は君臣、情けは父子』という言葉があるが、このときほど、「御民、われ生ける験あり」と嬉しさとありがたさに満ちた瞬間は生涯にないであろう。

本社工場勤務の者は、昼勤の者も夜勤の者も、作業中以外の者は全部工場内の何カ所かに整列して奉送迎したのであるが、鶴谷工場、海崎工場勤務の者は、門前に整列しており、これら約三百名の熱誠溢れる万歳の声の中に佐伯駅に向かわれた。

このようにして、両陛下には殊の外御機嫌麗しく、種々御下問があったが、要は日本民族の将来のため、「奮励努力せよ。」という聖慮と拝察申し上げ、お言葉の中に国民一人一人に対するしみじみとした御愛情が拝せられた。今更ながら恐懼感涙に咽んだ次第である。

県内数ある企業の中から、今回の行幸啓にあたり、唯一の民間企業として当社をお選びいただいたのは、木下知事であり、平素当社に御愛情を賜り、有縁の皆様のお陰であることを今しみじみと思う。御先導申し上げる私には後から来られる方達の事は見えもしないし、その時気にもしていなかったが、木下知事さんは、若い私がうまく御

案内するかどうか、はらはらしながら後から私の一挙一動を見守っていただいていたのではなかろうか、私は自分の雙肩の荷がいよいよ重くなったように思う。

『感激を銘肝し、聖旨に応じて奉らねばならぬ。』『皆様の御愛情にお酬いするところがなくてはならぬ。』私以下全従業員一体となって日々の業務に微力ながら傾倒する。それが世界に類を見ぬ日本の歴史を受け継ぎ、天壌無窮の皇運を扶翼し奉って、全国民一体としての日本を後世に伝えていくことが最大の道であると確信し、一段の努力を尽くすことを覚悟した次第である。

【御視察を終えて】

当社巡幸の当日、従業員八百余名が出迎える中、御料車が遅れ、気を揉まれた社長だったが、約三十分余にわたり両陛下と向き合い、合板の製造過程についてお言葉を交わした方は他にいないだろう。社長は緊張の連続であったようですが、この光栄は二度と無い事柄で、懸命に御案内を勤め上げました。

会社の概要につきましては「奏上文」を御覧下さい。振り返れば、初代社長は戦後復興のなか佐伯市の地を選び、裸一貫から昭和二十一年十二月一日、二平合板を興し、以後、僅か二十年の歳月で合板業界の王座を占め、全国に、海外に二平合板の名を広められました。

特に「輸出こそ国力発展の礎」であると云う信念の下に、佐伯港を外国航路のアウトポートの指定に漕ぎつけた社長の手腕は計り知れません。佐伯港から直接船積みできたと云うことは、社長の人生にとって最大の快感の一つであったと思います。

輸出振興と良品製造に励み、販路も東京出張所を振り出しに大阪・福岡・大分・鹿児島に構え、営業マンたちは製品の販売に、自信を持って携わり、更に販売網を広げ、年々売上高を延ばして来ました。

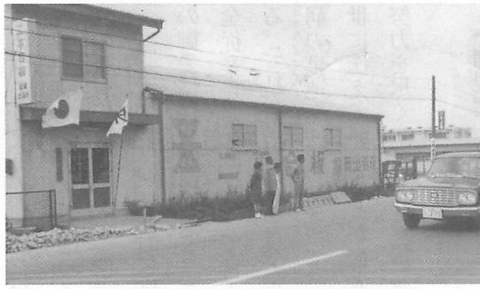
今回、当社工場を御視察なされたことは、木下知事のご進言のお陰と云われていますが、二代続いて大分県貿易協会会長に推され、その振興に尽くされたご縁だとお察しいたします。

先ず、御案内で材料のラワン原木丸太の所では、御熱心に御下問があり学者としての一面が浮かばれました。製品展示場では、両陛下は興味深く御覧になられ、親が子に云うようにお尋ねになられたと云われ、陛下の心中は終

生一度の体験だったに違いありません。全国の同業者の中では、唯一当社だけで二平合板の誇りと云っても過言ではないと思います。

こんなに身近に両陛下のご容姿を拝見したことはなく、従業員のことまでご心配なされ、御愛情を注いで戴いた無上の喜びは、社業発展に心して作業に精励する意気込みを感じた次第です。凡そ三十分間にわたるご視察を満足げに終えられ、自ら「ありがとう！」と云って万歳三唱、日の丸の小旗をふる従業員一同の中、午後二時二十七分、お召しの車に召されて佐伯駅に向かわれました。

私は福岡出張所勤務でしたが、天皇陛下が乗られた御料車は、出張所前の国道三号線を復路共通過、所員は玄関先に日の丸の旗、社旗を掲げ奉送迎した次第です。



二平合板福岡出張所にて奉送迎

【終わりに】

二平合板は、平成九年九月三十日付けをもって、五十一年間にわたる事業を閉じました。

會（かつ）て、葛港の工場跡地に作られた「港ロマンパーク」の一角に、初代社長村上弘一翁の胸像が建立されており、在りし日の面影が何時も大空大海を見つめています。

天皇・皇后両陛下が佐伯の地を訪れ、当社を視察されたことを、佐伯市、大分県の歴史として後世に伝えていこうと願っています。

初代社長　村上弘一氏胸像